

6月総評 西躰かずよし

これまでからの書き手と、新たな書き手が競って投稿を行うことで、全体の作品の水準があがってきているように感じる。今月の作品では日常を日常のまま表現することを狙ったものに惹かれた。

川べりの夜の桜の散るちから、
ちからのはなびらを浴びている 郡司和斗 茨城県

斉藤斎藤の歌に「慣れるちから、忘れるちからをあわせればだいじょうぶだと信じていよう」というのがある。それと同様にこの作品からも「散る」という後ろ向きの言葉を、「ちから」という言葉で反転したいという私の願望を感じることができるが、そのあとにつづく「ちからのはなびらを浴びている」というフレーズからは、斉藤の歌にはないダイナミックさを感じられる。

サイレンが
遠くに消えて

蛍 長谷川柊香 宮城県

現在の俳壇では余り用いられない字足らず、分かち書きという方法を使って書かれた作品であるが、それらの方法を駆使することで、所謂俳句よりも俳句らしい作品に仕上がっている。それは、切れの顕在化と、状景の描き方に拠るところが大きいのだろう。

耳元のおはよう
(朝がこんなに眩しく感じるのは
きっと荒井さんのせい) 広田 土 大阪府

なんのことはない日常をなんのこともなく書いた作品。しかし、そうした内容を作品として表現できるのは、書き手の力量ゆえだろう。短歌ではなく短詩で表現するというのも新鮮。この作者の他の作品には「二十億光年の孤独に／思わずくしゃみ／水曜二限」というものもある。

東京の一階に引っ越してすぐの

あたしが盛り付けた海鮮丼

豊富 瑞歩 茨城県

あまりにさりげない書きぶりから、読み飛ばしてしまいそうになるが、「あたしが盛り付けた海鮮丼」というフレーズで、一気に読者は作中のあたしへと引き寄せられる。一人暮らしを始めたばかりなのだろうか。出発のうれしさと、不安、たどたどしさが伝わってくる。

腕時計になる。

夜の空を飛ぶ。

翠 東京都

この作品の持ち味は説明的な言葉を一切捨てているところだろう。何故、腕時計になるのか、夜の空を飛ぶのかは読者に委ねられる。だからこそそのつぶやきは説得力を持つ。コマーシャルになりそうな作品である。

二番目の母が一番好きだった

まちりこ 埼玉県

二番目の母を一番好きと書くことで、産んだ母をそれほど好いてはいないことと、私が母親のつぎつぎと変わる状況に置かれているであろうことが容易に想像できる。同じ作者の作品で「美しい訛りで／夜を見渡せば／色づいていく／おかえりの声」という憧れにも似た母の声を想起させるようなものもある。

ハンカチに水の刺繍をしてあげる

細村 星一郎 東京都

消えていくものとしての水と消えないものとしての刺繍。そしてそれをしてあげるという私自身もまたその矛盾のなかにいるのだろう。